

私は日本で今まで見たどの峠よりも、この峠を誉め讃えたい

イギリス人女性旅行家

矢立峠 明治新道を越える

矢立峠 明治新道 (田羽州街道)

開道一番は、下内沢国有林と称し貴重になった天然林田村の保存と、矢立峠通行者及び周辺集落の難い地として、広く国民の保健休養を目的としたレクリエーションの森に指定している矢立風林です。

矢立峠歴史の道を保護するため近代東部森林管理署は、「北羽歴史研究会」の協力により、この「歴史の道」を踏める入りが安全で楽しく自然を満喫できるように歩道の整備を行いました。

さらに、治山ダムを設置して、下流域への土砂の流出防止と土石流災害の防止を期し、水資源のかん養に資することとしました。

また、この開道は青森・秋田の県境にあり、矢立峠と称され古来の「歴史の道」でもあります。明治新道は、明治一〇年に明治時代の古街道に代えて、青森と秋田を結ぶ交通の要路として総工費九千五百二円をもちて建設され、明治近代化の歴史を物語るものです。

【史跡事項】

明治二十一年七月二日、英婦人旅行家、イザベラ・バードが白沢を発ち、津軽峠を渡へ。
「日本奥地紀行」に「日本まで今まで最大の峠よりも、私はこの峠をほめたたい」と記す。

明治二十四年九月一日、明治天皇行幸、青森県より秋田県に入り、峠の野立所に休息す。

明治二十七年七月、青森、秋田、大館の要合馬車街道し、能代、秋田と連絡す。

明治三十五年、新ルート(旧街道)の整備開削が施工される。

平成二十二年三月、東北森林管理局 近代東部森林管理署

矢立遊歩道
矢立峠歴史の道略図



広報市民リポーターだより No.2

リポーター 小林重信さん(川口1区)

イギリス人女性旅行家

皆さんは、イザベラ・バードというイギリスの女性旅行家をご存知でしょうか。

バードは、1878(明治11)年に横浜に上陸し、東京から日光、新潟、米沢、久保田(秋田)を通り、大館から矢立峠を経由して青森、更には北海道に向かい、東京へ戻った旅の記録を「日本奥地紀行」として出版しています。

私は、大館市民劇場の一員で、今年の公演は、矢立峠に虹が立つ」という題名で、バードが大館に入り、白沢で滞在したところが物語となっています。

そこで、公演をご覧いただく前に、バードとはどんな人間なのかどのような旅行をしたのか、当時



イザベラ・バード

の日本はどうだったのかなどを知っていただきたいと思い、イザベラ・バードが「日本奥地紀行」でたどった道をリポートします。

イザベラ・バードの生涯

19世紀末になると、陸や海の交通網が発達したことで、世界漫遊ブームがイギリスに起こり、多くの優れた旅行家が輩出されました。バードもその一人だったのです。

バードは、1831年10月15日イギリスのスコットランド州ヨークシャーで生まれました。幼い頃からせきついの病気に悩まされていたため、病弱な身体を改善させる一つの手段として、外国旅行「航海」を医師から勧められ、1854年に、アメリカ、カナダを訪れたことが「諸国紀行」の始まりといわれています。

1856年に、最初の旅行記「英国女性の見たアメリカ」を出版。1857年再びアメリカに渡り、1873年までの16年間、スコットランド西海岸、オーストラリア、

ニュージーランド、ハワイ諸島を旅行した後、騎乗によるロッキーマン脈越えを敢行し、ロッキーマン脈の診療所で数カ月を過ごし帰国しています。

バードは、旅行先々から旅の见闻、消息を妹のヘンリエッタに手紙で詳しく報告していました。その手紙を整理して、1875年、ハワイ諸島の6カ月間」を出版。その後出版された数々の旅行記も、妹や友人・知人にあてた手紙をもとに、整理され出版されたものだとされています。

バードの粘り強い精神力は「日本奥地紀行」(原題「日本の末路の地」に読み取ることが出来ます。ビクトリア時代(1837年~1901年)を生きたバードは、知的好奇心が強く、歴史好き、実証主義、孤独に強く、宣教師の娘であったこともあり、勤勉で厳格な癖、自主独立の精神が非常に強かった人だったように思われます。70歳まで世界各国をめぐる、1904年10月7日、病没。享年72歳。